



Back to

1974

Nagashima

# 日本三大急潮の橋

〜黒之瀬戸大橋〜

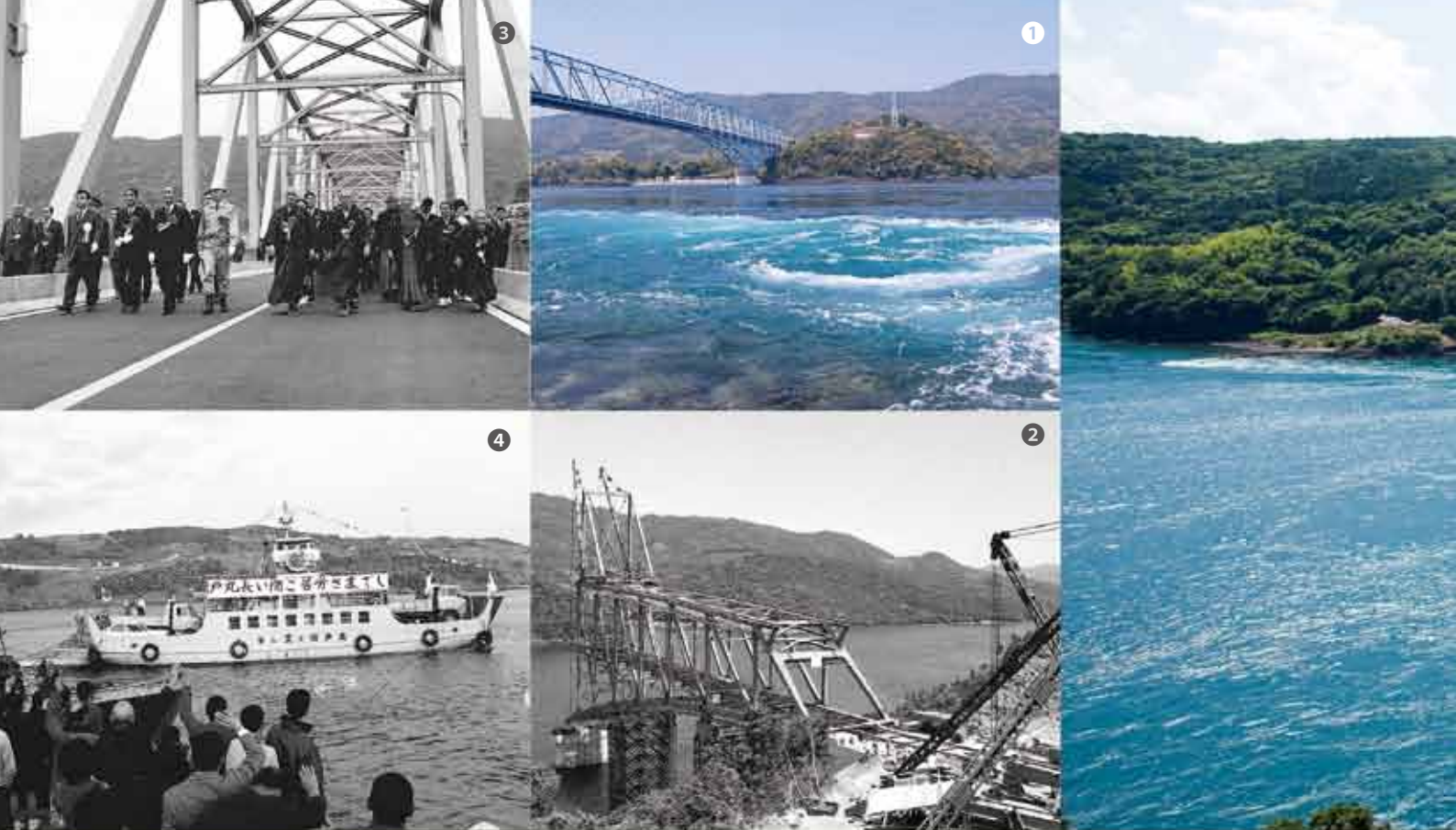
離島から半島へ。  
急流海峡をまたぐトラス橋が  
島の暮らしを大きく変えた。

鹿児島県最北端に位置する出水郡長島町。長島本島と伊唐諸島、諸浦島、獅子島など大小23の島々からなる美しい島です。この島に、本土・阿久根市とつながる橋が架かったのは、今からおおよそ40年前のこと。

「隼人の薩摩の瀬戸を 雲居なす 遠くも我は今 日見つるかも」と、古くから万葉集にも詠まれてきた海上交通の難所、黒之瀬戸は阿久根市脇本と長島の間を横たわる急流海峡です。その幅は、350メートル程度にもかかわらず、最大流速は約8ノット（秒速約4メートル）に達すると言われ、長い間、島の産業・経済の発展を妨げていました。

架橋前は、県営フェリーが住民の貴重な交通手段となっていました。時代の変化とともに長島・阿久根の両渡船場には連日車の列が続き、積み残しも出る状態でした。

このため、島内から「黒之瀬戸に橋を」という声があがり、行政・住民が一体となった十年間に及ぶ国等への要望活動の結果、昭和44年1月、黒之瀬戸大橋の着工が決定しました。



①干潮時には大渦が出現する黒之瀬戸 ②急流のため橋脚基礎部の施工は難工事だったが、工法等の技術的な工夫が重ねられた  
③完成を祝って、工事関係者や地元の人たちが記念の渡り初め ④大橋の完成により、引退することとなった県営フェリー第三黒之瀬戸丸

こうして昭和47年5月から建設が進められ、昭和49年に橋長502メートルのトラス橋が完成しました。4月9日に行われた開通式では、町民から万歳の声があがったほか、阿久根市側と長島側から関係者600人の渡り初めが行われ、橋の中央で喜びを分かち合いました。

こうした祝賀ムードのなか、長く島民の生活を支えてきた県営フェリーはその役目を終えました。最終便出発の際には、地元住民や小学生ら400人が集まり、棒踊りや鼓笛隊の演奏などで船員の労をねぎらいました。

架橋により、住民には、救急医療やライフラインの安定といった生活への安心がもたらされました。産業面では、いつでも大量運搬、安定出荷が可能となり、全国でも有数の養殖ブリの産地として飛躍したほか、長島町特産の「赤土バレイシヨ」もその銘柄を確立。また、観光面でも、島内に「太陽の里」等をはじめとしたレジャー施設や道の駅が整備され、多くの観光客が来島するようになりました。

通行にあたっては、当初は建設費用を30年で回収するため通行料金が徴収されていましたが、予想を上回る交通量があったことから、大幅に償還期間が短縮され、平成2年9月から通行無料となりました。

古来、先人たちが命がけで渡っていた急流は、架橋により、歩いて7分、車なら40秒で通行できるようになり、住民の生活は一変しました。ここに、「離島から半島へ」という住民の悲願が叶ったのです。

※トラス橋＝橋桁にトラス（三角形に組み合わせた骨組み）構造を使った橋。